研究ノート

全真教の清規について（下）

窪　徳忠

1.『清規玄妙』概観

現在私の手許には，前述の陸道和編『全真清規』は別にして，『清規玄妙』，1937年太清宮刊の紀至隠編『全真須知』，1972年香港九竜の青松観宣道部重刊の『全真清規』，および1940年北京の白雲観刊の安世霖編『白雲観全真道範』の4種の清規類がある。これらのうちで『白雲観全真道範』は，その根本の精神は古来の清規のそれを継承しているとはいうものの，観内に騒動があり，その反対派を制圧して監院となった安世霖が編集している関係から，方丈・監院の資格やその推選法などを始めとして，いささか偏向した性格がみられる上に，かなりの条項を故大正大学教授吉岡義豊が飜訳しているから，ここでは一応考察外にしておく。(1)

『全真須知』の最初の4葉の版心には「玄門必読」と記され，あとは末尾まで「全真須知」と印刷されている。同書の表題が「全真須知」であることは，いうまでもない。2年間道士として，中国東北部の瀋陽（旧奉天）所在の太清宮内で起居した五十嵐賢隆は，その体験を基として『太清宮志』を著わしたが，(2)在観中に40種の道教関係の典籍を蒐集し，その書名を自著のなかに掲げている（165頁以下）。そのなかに『玄門必読』（1929年刊）の名がみえているから，五十嵐が太清宮在観当時の1930年代後半には，同書は簡単に入手できたことがわかる。そうしてかれは，自著に同書の「清規榜」（184頁），「戒食銘」（189頁），「執事榜」（198頁）などを引用している。それらの文は紙幅の関係を考慮した結果であろうが，すべて節略されているけれども，『全真須知』所収のものと比べてみると，多少の字句の相違を別にすれば，いずれも同文である。『玄門必読』の原文を未見の私としては，断言はできないけれども，以上の点および刊行年から推して，『全真須知』は『玄門必読』に基いて編集されたものと考える。そうして，『全真須知』の最初の4葉の版心の「玄門必読」の文字は，『全真須知』の編者の迂闊な見落としの結果と推断する。

また，五十嵐は『全真須知』所収の「道祖法系」や道教のさまざまな分派名・分派の開祖の略伝・分派特有の派詩，その他を記した文献を「宗派別」とよび，(3)太清宮蔵本としている。従って，おそらく『玄門必読』には収められていなかったに相違ない。これまた，『玄門必読』と『全真須知』との相違点のひとつになろう。

ところで，これら両書の内容と『清規玄妙』のそれとを比較してみると，「玄門必読」と版心に記されている『全真須知』の最初の4葉のうち，冒頭の「太上玄門功課経序」，「清規玄範法派仙宗」，および「遊方礼師」など数項を除いて，雲水の際の随身七宝，頭巾，掛単のやり方，朝謁の法，観内での行住坐臥，服式，朝参の公服，初会の際の応答，内修の経典名，功行を先きとして修行することなどに関する規定は，字句に多少の出入こそあれ，その大筋は両者まったく一致してい

る。その反面，『清規玄妙』には全然みえていない条項もある。いささか煩わしいが，その項目をつぎにあげてみると，「十大洞天名山勝景」，「邱祖青天歌」，「陰符経」，「素書註」，「太上護国祈雨消魔経」，「鉄刹山宗譜序」，「郭祖道行碑誌」などが，それである。これらは，いわゆる清規とは無関係であるから，『清規玄妙』に含まれていないのは，当然であろう。

『清規玄妙』の内容は，後述のように「全真参訪外集」と「全真参訪内集」――以下「外集」と「内集」と略称する――とに2大別されている。これに対して，『全真須知』は「清規須知外参訪」，「学道須知内参訪」および「道祖法系」以下の3部からなっている。そうして，「清規須知外参訪」は「外集」に，「学道須知内参訪」は「内集」に，それぞれ類似している。尤も，類似しているとはいうものの，なぜか「外集」所掲の王常月『玄門持戒編』所掲の10ヵ条を欠く。一方，『玄門必読』は，『全真須知』の「玄門必読」と記した版心をもつ4葉が「外集」の一部に，五十嵐が『太清宮志』に引く「清規榜」などが「内集」の一部に，それぞれ酷似した文である点から推して，おそらく『清規玄妙』とほぼ同様な内容をそなえていたように思われる。そうして，「十大洞天名山勝景」以下の文は，多分『全真須知』編集の際に新たにその編者が恣意的に附加したのではないかと臆測する。『玄門必読』などが，いわば一般的な清規としての性格がつよいのに対して，『全真須知』が中国東北部，とくに遼東地区の鉄刹山（遼寧省本溪県）関係の系統に属する全真道士の手によって編集された関係上，特殊な一地方色のつよい傾向がみられるためである。

いづれにしても，私には，清規としては『清規玄妙』→『玄門必読』→『全真須知』という順が辿れるように思われる。

香港九竜の新界にある青松観は，以前はある儀礼をうけて自発的に入信した人々によって組織された私的な結社組織であったが，のちに発展して道観に成長したものであるという。(4)そこで刊行したのが，さきにあげた青松観宣道部重刊の『全真清規』である。表紙には「全真清規　壬子仲冬　青松観重刊」とあるが，内題には「金蓋山純陽宮刊本　全真清規」とあり，本文の冒頭には「京都白雲観原本　湖州金蓋山重刊　帰安壷隠子凌来蘇校字」と記されている。これらについて簡単に説明し，同本の紹介としたい。

ここにいう「京都白雲観」とは，全真教の本山格となっている，現在の北京の白雲観の謂に相違ない。明の成祖のとき以来，北京が中国の首都と定められていたためである。「湖州金蓋山」とは，浙江省の太湖に臨む呉興県の金蓋山に当るであろう。金蓋山が「呉興の金蓋山」と通称されているからである。『清規玄妙』の編者でもあり，18世紀中葉から19世紀にかけて在世した竜門派第11代道士の閔懶雲の『金蓋心燈』の序によると，丘長春の弟子趙虚静5代の沈頓空が金蓋山に道観を創立してから，全真教竜門派がここに地歩を占めるようになった由である。(5)おそらく，その道観が純陽宮であり，そこに「原本」とされる『全真清規』が北京の白雲観から伝えられたのであろう。伝えられた時期はよくわからないが，18世紀末から19世紀初頭にかけてのころだったように臆測している。そうして，当時の全真道士たちの生活の刷新を願う閔懶雲たちの手によって，純陽宮の実情に則した内容に改められて刊行されたのが，「金蓋山純陽宮刊本　全真清規」であったように思われる。清規は，各道観の実情に則し，それにふさわしいように内容を多少変更しても差し支えないといわれていたためである。閔懶雲たちの手によって刊行されたであろうと推測する根拠は，同書巻末に，沈軽雲，閔懶雲およびその弟子費撓雲3名の誥語が附載されている点である。

荘厳居士所撰の『道統源流』によれば，沈軽雲と閔懶雲とは，ともに竜門派第10代高東籬の弟子であり，費撓雲は閔懶雲の弟子とみえている。(6)ただ，それらの伝には『全真清規』を編集したことにふれてはいないけれども，沈軽雲たちの名が巻末に記されていることによって裏書きされると考える。もし，関係しなかったとすれば，そこにそれらの人々の名を記す必要がないと思われるからである。また，刊行の際に校字を行なったとされている凌来蘇は，『道統源流』によると，費撓雲の弟子で，原名を奐，号は暁五，壺隠子を道号とする全真教第13代（竜門派）の道士で，浙江省帰安県（現呉興県）の生まれで医術にくわしく，その地方で著名な人物だった。けれども，原因は不明ながら30才前後のころに入道して道士となり，始めは正一教に属して正一五雷の法に精通したが，のち全真教に入り，湖州（呉興県）の分壇支派を興した著名な道士であった。従って，純陽宮としては，大変重要な事業として『全真清規』の編集に当ったとみても大過ないであろう。そして，実はそのようにして編集された『全真清規』こそが，『清規玄妙』そのものであったのである。

『清規玄妙』が，いつごろ九竜の青松観に伝えられたのか，その時期はわからない。けれども臆測するに，前述のように，『全真清規』は「壬子（1972）」に重刊されたものであり，志賀市子の調査報告によれば，青松観は1941年に広東省広州のあるビルの一室に祭壇をおいて発足し，1949年に現在の場所を購入して殿堂や宿舎を建設して，青松観と称した由である。(7)このことから推して，観の建設者たちは，なるべく早く道観としての組織や体裁を完備すべく，懸命な努力をしたであろうから，その一環として，かなり早い時期，おそらく1950年代の後半か60年代の初期に『清規玄妙』を入手し，いささか手を加えて，1972年に公刊したのではなかろうかと推測される。

『清規玄妙』と『全真清規』とを比べてみると，前者の冒頭には2項の「宝誥」，「遺言」，閔懶雲の「自述」が掲げられているが，後者にはない。また，前者の「外集」の末尾には『古書隠楼蔵書』に批註を施した式一子の跋があるが，後者にはない。その代わりに，後者の「規矩須知」の末尾には，『霊宝無量度人上品妙経』巻一所収の「元始霊書中篇」の東西南北各八天の文が，「元始霊書中篇」とのみ題して掲げられている。(8)これらの文は，清規とはまったく無関係なので，ここに掲げた理由がわからない。つぎに，後者の末尾には，前者にはみえない「全真派単」や，沈軽雲，閔懶雲，費撓雲などの誥語が掲げられているのに対して，前者には「長春祖師垂訓文」が収められている。「長春祖師垂訓文」は，おそらく丘長春に名をかりたものであろうけれども，道士たちの平生の心構えや態度を諭した内容の文であるから，清規に収めて然るべきものである。(9)そのような文を省略するのは，いささか当を得ない編集といわなければなるまい。さらに，後者には前者の字句を改めている個所が少なくない。従って，「重刊」とはいいながら，文字通りの重刊ではない。とはいうものの，きわめて大雑把にいえば，一応前者の意途しているところを伝えているといって差支えない。従って，先きにのべた清規の順に，さらに『清規玄妙』→『金蓋山純陽宮刊本　全真清規』の線を加えることができるとみることができる。要するに，『清規玄妙』は，元代の『全真清規』の精神を現代に伝えるきわめて重要な書という性格をもっているのである。

2. 閔懶雲伝

『清規玄妙』の中心の編者と考えられる閔懶雲の伝記は，『清規玄妙』巻首の「自述」，『金蓋心

燈』末尾の3篇の「閔懶雲先生伝」，卿希泰主編『中国道教』第1冊所収の「閔一得」の条などにみえているが，ここでは『清規玄妙』巻首の自述を主とし，他の伝で補足しつつ紹介することにしたい。(10)

かれは，乾隆23年(1758)12月2日，代々呉興地方の名望家として知られていた閔家に生まれた。兄弟の有無については記述がないので，わからない。「自述」には，かれの誕生の際に，母親は夢に天から長さ約3尺ばかりの紅燈が下りてきて，ゆっくり胸元に近づくのを裾でうけて室に入ろうとしたら，急に腹が大いに震えてかれを生んだ。そのとき，かれの父親は書斎でうたたねをしていたが，清らかな痩せぎすの老道士と2人の侍童が現われ，ひとりの侍童が名刺を差出しつつ，先生が見えましたと告げる。よくみると，紅紙上に貝懶雲と記されている。そして，老道士は前に進みでて父親に会釈したかと思うと，急に産室内に入ろうとする。父親が急いで止めようとすると，たちまち姿がみえなくなった。そこへ召使いが扉をあけて入ってきて，ご主人，起きて下さい。奥さまが男の赤ちゃんをお産みになりましたという。このとき父親は，すぐに貝老道士すなわち南宋時代の貝大欽，懶雲と号し，詔を奉じて浙江省余杭県の洞霄宮住持となった著名な道士が転生したと直感したわけである。以上の話は，「自述」に記されているのだから，閔懶雲がおそらく父から告げられて，信じていたのであろう。そのために，かれは自ら懶雲と号したのである。

かれの父大夏は挙人にあげられ，河南省息県（現同名）の県令に任ぜられてのち余杭県（浙江省同名）の教諭に遷った人物であった。従って，かれの家は儒家だったように思われる。名を苕甹，字を補之，別に小艮という字をもっていたかれは，貝懶雲の生まれ変わりというところから，自ら懶雲子とも名乗ったというが，懶雲子は道号だとの説もある。幼少のころから頭がよかったというが，生来病弱で足が弱く，膝の骨はまるで豆のように小さかったので，九才になってもよく歩くことができなかった。そのためか，友達たちと遊んでいるうちに，誤って井戸の中に落ちた。何者かが助けだしたようにして助かったが，そうでなければ死んでいたらしい。あるいは，幼少時より後年著名な道士となるべく，神明の加護があったのかもしれない。身体的欠陥はあったけれども，早くから父の教えに従って，儒学の勉強に従っていた。しかし，やはり身体的障害のために，科挙に応ずることはできなかった。

十余才になったころ，松や柏などの樹木が茂り，そのあいだから殿閣が見えかくれする仙山にいった夢をみた。あたりは，濃い緑色の叢だったが，その中から以前に会ったことがあるように思われる2，3人の道士が現われ，導引――柔軟体操によく似た道教の長生法の一種で，気功と共通性あり――法を教えてくれた。夢がさめてから，その方法を実行すると，100日足らずで両膝の骨が銭ぐらいの太さになって，漸く歩くことができるようになった。けれども，また数年したら病気になってしまった。父が出家入道するように勧めたので，それに従い，旅にでて，まず天台山の紫陽宮にいった。紫陽宮は，以前の桐柏宮の後身の崇道観の下院である。桐柏宮は王子晋を開山とする由緒のある道観だったが，のち興廃を重ねて，清朝の雍正年間（18世紀前半）には土豪の侵すところとなってしまった。それを全真教竜門派の范清一が茅山からきて再興し，ついで張紫陽が重建して崇道観と名づけた。かれが紫陽観にいった際には，全真教竜門派第10代道士の高東籬が崇道観主であった。当時110才だった高東籬の下で衆道士を統轄していた沈一炳，軽雲子が，父と従兄弟だった関係で尋ねたところ，以前に来たことがあるような感じを覚え，去り難い気になった。すると，高東籬がここにいれば病は治るという。父も崇道観に入ることを許したの

で，高東籬の弟子となって入道した。「自述」には記されていないが，かれはこのとき懶雲子と号する道士となったのであろう。かれは，全真教竜門派の第11代の道士であるために，一得ともいう。

全真教では，他の道教教団とは異なり，師の教説を聞き，自分なりに「道の本質」を捉え得た，換言すれば悟りの境地に達したと考えた場合には，禅宗同様に分派を開いてその派祖となることが認められている。(11)その場合には，自己の悟りえた内容を詩に表現する必要がある。それが派詩である。たとえば，開祖王重陽随一の高弟である馬丹陽は，遇山派の祖であり，その派詩は

自元来正志　冲寿成仙丹　忠靜得礼義　了然見朝天　（下略）

である。(12)丘長春を派祖とする竜門派の派詩は

道徳通玄靜　真常守太清　一陽来復本　合教永円明　（下略）

である。そして，前述のように，その派に属する道士たちは自己の代数に従って，派詩の相当数の文字を自分の道号の上の一字としなければならない。たとえば，竜門派の第1代は趙道堅，第2代は郭徳真という工合である。従って，道士の道号をその派の派詩に照合すれば，第何代かが直ちに判明するのである。閔懶雲が竜門派第11代目の道士である由は，一得なる道号を派詩に照らせば直ちに明白になる。このことは，雲遊にでて，他の道観を訪れた際に行われる掛単のときに尋ねられ，万一誤っていると不正者として逐出されてしまうから，これまた清規の一環となるわけである。（補註）

それはとにかく，閔懶雲は3年間崇道観に留って高東籬の教えをうけたところ，病気も治り精神も健全になった。のち山を下って親の許に戻ったが，功名を思わず，両親もその志を許しはしたものの，詩書の勉学だけは続けさせられた。その間，いささか各地を巡り歩きつつ修行を重ねたが，数年後父の心が変って仕官を要求するようになったので，州司馬の職を買って，雲南省に赴いた。けれども，間もなく父が死去したので帰郷し，母も続いて死亡したのを機に金蓋山に入って，再び俗界には戻らなかった。

高東籬の歿後は，その高弟だった沈軽雲に師礼をもって仕えた。それは，高東籬の命だったのである。そして，沈軽雲から授けられた「十義之訓」を守ること数十年。その間，少しも懈怠することがなかったというから，余程真面目な性格の人物だったと考えられる。沈軽雲歿後も金蓋山にいたが，陶靖菴が以前に修行をしたところだといいながら，堂宇が傾頽しているのを嘆いて，その修葺増築に着手した。(13)そして，梅の木を百株も植えて，面目を一新させた。また，ときには江蘇，浙江，湖北から河北，山西方面にまで足をのばして，縁をたよって搢紳たちから胥吏にいたる多くの人々にあって，道を説いた。その性格は秋月，春風に譬えられる一方，動かざること山の如き一面も持っていた上に，心の広い人物であった。言葉は少ないが，口からだすのはすべて至道の語であり，起居はまことに純粋であった。人に教える際には，本質，応用，ことの本末を諄々として説ききかせた。実行を重視し，神秘的なことはしりぞけた。窮理盡性を旨としていたが，のち丹経が正邪混淆していて，弊害の多いことを歎き，平生師友や各地の道を好む人々からきいた話を元に，かれらの所蔵する書物のうちから正しいと思われるものを選んで校訂し，真偽を弁別して，陰陽採補すなわち房中術などの訛伝邪説はすべて斥けて説いた。その著には，『金蓋心燈』8巻，『古書隠楼蔵書』28種，『還源篇』などがあるが，その説は儒仏2教の精華をもって道教の玄妙を説きあかしているといわれている。

この点について，かれ自身は，雲南にいたころ，鶏足道者黄真人から『呂祖三尼医世説』なる一書を示めされ，これは恰も『仏説持世陀羅尼経』のような書で，お前が帰国して誠心をもって探せば必ず入手することができるだろうと告げられた。帰国後数年して，果してその言葉通りにその書を入手することができたので，纂訂出版しようと思っていたところ，『仏説持世陀羅尼経』も入手できた。その内容は，以前に先師から教えられたさまざまな説と同様なので，合して一篇として世の同志に献呈するとのべている。果たしてその書が世に出たか否かは明らかではないが，かれの弟子たちの記した伝記には同書の公刊されたことはみえていないから，恐らく未刊に終ったのであろう。それにしても，それらの内容は仏教系のように推測される。そのような説を容れていることは，ひとつには全真教が儒仏道三教同源論に立っている由を明示する例となるであろう。なお，鶏足道者黄真人とは，『金蓋心燈』巻6上，「鶏足道者黄律師伝」の条によれば，月氏すなわち甘粛省の西方に住んでいた民族出身で，姓や字はなく，野怛婆闍と自称していたが，順治庚子（1660）の年に北京にきて全真道士の王常月に会い，黄守中という姓名を貰って全真道士となり，雲南鶏足山の一派を開いた人物だという。(14)

閔懶雲は，書を著わし，弟子たちに教え，全真教を拡めるのに努力していたが，78才になった1835年，その嗣子が老年を心配して家に伴い帰って養生させた。その翌1836年冬ふとした病気が元で床につき，11月10日に世を去った。79才だった。その亡軀は，弟子たちの手によって金蓋山の東麓に葬られたという。閔懶雲について，『中国道教』の編者は著名な内丹家であったと説く。内丹法とは，外丹法に対する語で，外丹法が薬物によってつくられたさまざまな薬，とくに金丹などによって長生することを目的とするのに対して，内丹法は，精神，気力などを修養によって体内に充実させて長生しようと説く方法である。たしかにかれは精神面の修養を強調するから内丹家ということができるであろうが，その半面清規を重視しているから，単なる内丹家というわけにはいくまい。やはり，制度，規則を確立し，教団としての組織や体裁の整備にもふかく心を配った道士としなければならないであろう。その点から見て私は，かれは清初に全真教を改革すべく努力を重ねた王常月にも匹敵する道士とみても差支えないのではないかと考えている。(15)

3.『清規玄妙』の内容

『清規玄妙』の内容については，さきに『全真須知』や青松観宣道部重刊の『全真清規』と比較した際にしばしばふれたから，大体の見当はつくであろう。その上，故吉岡義豊がその大半を假名交り文に書き下しているから，今更こと新しく紹介すべき必要はないかもしれない。(16)しかし，その内容を整理して纒める意味をも兼ねて，以下簡単に紹介しよう。

前にもふれたように，『清規玄妙』は巻首に「二宝誥」，「遺言」，(17)「自述」が掲げられているが，これらはおそらく編者の意にでたものであろう。本文は「清規元妙全真参訪外集」と「清規元妙全真参訪内集」とに大きく分けられ，前者は「規矩須知」，後者は「学道須知」である。前者では，その篇題を掲げたのちに，その説明としてか

右集。纂自碧雲子而訂正于逍遥客。我山僻在呉興金蓋。道衆楽聞。爰為重梓。閔小艮敬跋。

という閔懶雲の跋文が記されている。この跋によると，碧雲子なる人物がすでに以前から清規の訂正に着手していて，それを金蓋山の道士たちが知りたがったので，かれが重梓したことになり，『清規玄妙』の前身が金蓋山以外の場処でほぼでき上がっていたように解釈される。けれども，碧

雲子なる道士の伝がまったくわからない現在の私にとっては，いかにも解釈が困難なので，この記述の所在を指摘するのみに止めておく。ご存じの方があったら，ぜひ示教をお願いしたい。

つぎには，宗源，法派の明白であるべきことを強調し，開祖王重陽の直弟子を派祖とする七派，すなわち丘長春の開いた竜門派，劉長生の隨山派，譚長真の南無派，馬丹陽の遇仙(のちには山)派，郝太古の華山派，王玉陽の嶽山派および孫清淨の清静派の名を掲げて，他派の道士と会った際に誤って他派の名を名乗らないよう厳しく注意している。

次項以後については，きわめて簡単ながら別稿で説明したことがあるので，ここでは項目と簡略な説明を附するだけに止めておきたい。(18)

1，全真道士の雲水の際に所持する7種のもの。蒲団，衲衣，単瓢，棕笠，棕扇，青色の袋，平薄な杖で，これを「七宝」という。それぞれの意味を充分に弁え，勝手な取扱をしてはいけないと，細かい注意が記されている。

1，唐巾，冲和巾，浩然巾，逍遙巾，紫陽巾，一字巾，綸巾，三教巾，九陽巾の9種の頭巾の説明。巾は受戒の階級によって相違あること，その着用の作法の注意。

1，掛単の作法と規矩。掛単とは，全真道士が雲遊にでて，然るべき道観にしばらく逗留したいと思った際の最初の問答とその際の作法，滞在中の動作その他の心得をいう。ここでは挨拶のやり方，衣や履物に関する注意も記されている。(補註)

1，神拜のやり方の威儀。稽首，三跪九叩の礼，鉢堂内での進退の方法が記されているが，そのなかに五体投地があるのには驚かされた。典座などに対する挨拶の仕方も定められている。

1，道観内における行住坐臥の規定の説明。たとえば問答の際には必ず起立すること，臥すときは曲げた弓のような形をとること，行くときは清風のごとく，立っている場合には蒼松のようにせよとある。また，勝手に国家のことを論じ，仏教を訕り，邪説をもって他人を惑わしてはいけないとみえている。

1，全真道士の服の色は，東方・木・泰卦の位である青色を主とすること。青は生旺の気でもあるためである。

1，公服は黄冠，玄巾，青衣を着し，白脚絆をつけて雲鞋（黒色）をはく。これは五行によっていることを示す。

1，初めて会った際には，しばらく時をおいたのちに出家地，住所，常住の道観名，派名を尋ねる。答えに偽りがなければ師弟の礼をとる。

1，内修には『陰符経』，『道徳経』，『黄庭経』，『清淨経』，『竜虎経』の五経と，『周易参同経』，『悟真篇』，『三皇玉訣』，『青華秘文』の四書が至要の経典である。その他になお道書全集，一切の真人たちの諸品仙経丹書があるが，これらも随時目を通してその意義を知る必要がある。ただし，煉丹，房中，服食，按摩その他の雑学は外道の流派だから，みる必要はないと，一応外丹派を退けている。

1，全真道士は，真功（自利），真行（利他）をつむことが第1で，ついで『皇経』，『度人経』，『玉枢経』，『三官経』，『北斗経』の五経と，『生神章』，『祭煉科』，『祈禱儀』，『千金方』の四書を習う必要がある。これらの書に通暁し，国家や人々の役に立つようにしなければならない。妖言，邪術，飲酒肉食，五辛をとることなどは宜しくない。

1，全真道士は，天を知り，道を楽しみ，一日中愚者のようにしているべきで，口数が多いのはいけない。山中や町中にいても，つねに慈悲を根本とし，清静，柔弱，功行を持し，賢能者を嫉妬したり，善をやぶってはいけない。こんなことをするものは「学道の士」とはいえない。

1，仏像，儒聖にも頂礼拝撃しなければいけない。これが円通である。

1，全真道士は役人に見える際には三揖三叩の礼を行なう。[19]そして，その折某観の道人が父母爺に参見すと口頭で称える。官が坐を命ずれば一揖して隅に座す。問答のときは起立し，坐ったまま答えてはいけない。

1，誦経の際には，和と誠とをもって行ない，一心不二の気持ちでなければならない。字句は心からでるようにする。
黙誦の場合には，字が天から下って目に入ってくるような気持が必要である。

1，神前の献香は，跪拜後香を捧げ，左手で炉に立てる。香と香の間は一寸以上離してはいけないし，真直に立てる必要がある。なお，くわしい説明があるが，はぶく。

1，神に供える水は，井戸からではなく，夜半の子の刻に川から汲まねばならない。または，清浄な布で幕を作って泉からとる必要がある。

1，供花は梅，蓮，蘭，桂を最上とし，桃，菊，杏，棠，牡丹，芍薬を次ぎとするが，無臭のものならば他の花でも供えてよい。

1，檀香は供えてはいけない。違えば重罪である。王常月が厳しく警めているし，『太微律註』にもあるが，唐の玄宗後とくに厳しくなっている。

1，夕食の接待は，五皿以内とする。夕刻以前にやめ，茶は玫瑰露などが最上である。

1，全真道士は昼食以後は食事をしない。[20]食事中は口をきかず，食後に坐ること，誦経を忌む。

1，斎堂で食事中，経堂で誦経中および打坐（座禅）中には，客がきても起たない。律を乱すためである。[21]

以下，王常月の『玄門持戒編』にみえている，戒本を習う以前に経法を習うことの不可，焚香礼拜して戒本をみること，師の説法を盗聴することの不可，威儀を飾らず，布施を求めぬこと，非事の礼拜の不可，礼拜は観主の許可をえること，礼拜は黙拜であること，礼拜時の位置，香燈や供物を粗略にせぬこと，焚香時には黙呪すること，貧乏や困難を我慢すること，他教の人々に道法をのべぬこと，施しを強要しないこと，豪貴の人に頼らぬこと，私用のために財を募らぬこと，わけもなく他の寺観や俗家に入らないこと，俗家にいった際には用件が終ったら直ちに退下すること，子供や親族たちと談笑しないこと，衣物を俗家におかぬこと，他出の際に威儀を失し，談笑しないこと，師に仕える法，視聴・言語・盥漱・飲食・出行・起立・坐臥・作務などに関する威儀などを10ヵ条にわけてくわしく紹介説明している。これらについては，紙幅の関係もあり，いささか繁雑なので，ここではくわしいことは省略するが，これらのことによっても王常月が当時の全真教団を改革し，新風を吹込むべく努力していた一端が諒解できるであろう。そうして，閔懶雲はその努力を嗣ごうとして努力していたのである。

内集は，学道須知と題されているように，全真道士の内面的修行を教えた内容である。従って，まず全真教が掲げる「性命双修」を知ることを第一にのべたのち，情愛を去り，戒を持して身心

を煉磨すること，邪道，富貴，奢りを去って雲遊し，名山があれば掛塔し，叢林に入って修行すること，五祖七真の教えに従って修行し，前掲のような諸経典によって玄妙を悟り，大道の極を会得するように努める。抱真守一を心がけ，万縁に染まず，一方では道友（伴）をつくって切磋し，和光同塵を心がけ，明月を覆う雲を払うようにする。正道を求めて一心に精進し，修行を重ねることを，葛洪，薩真君，許旌陽，陶弘景などの名をあげてその実例とし，苦行，積徳を勧めるが，人によっては漸頓の両途があるから，その行き方はさまざまだが，至道は一なので，自己に適した方途によって精進すれば神仙の域にいたると説く。ついで，「戒食銘」，「紫清真人清規榜」，「長春真人清規榜」，「長春真人執事榜」，「清規榜」，「執事榜」を掲げている。そのうち，「戒食銘」は斎堂に入る際の服装の心得と食事の作法，米を大事にする注意であり，「長春真人執事榜」と「清規榜」とは，すでに別稿で説明したので，[22]ここでは「紫清真人清規榜」「長春真人清規榜」および「執事榜」を簡単に紹介することに止めておく。なお，「清規榜」が清規に背いた際の罰則を記したものである旨を附記しておく。

「紫清真人執事榜」には，天・地・神・人・鬼の5仙は規矩方円を定める尊いものであるから，その教えに従えば自然に合し，背けば顚倒してしまう。自分のいる場所すなわち道観は聖賢神仙の居所と考え，朝夕焚香して聖寿の無疆と聖号とを宣揚しなければならない。その気持を忘れずに修行に努め，功行が満てば，身神ともに霊妙となる。そのためには，つねに清規を守り，師友を尊敬し，道を思い，日常の言動に注意しなければならない。是非を談じ，公私の用事で外出した際には，夜になってから帰ることは許されない。打坐は無言で，起床の鐘で起き，道観に来る際には掛塔し，去る折には抽単しなければならない。もしも違反すれば，軽い場合は香・油・茶・餅の罰を与え，重い場合には竹篦で打って下山させる。盗みを働いた場合には杖でたたき，衣鉢を焼燬する。賭博や葷酒すれば堂にいることは許さない。事を行なって邪淫姦騙ならば骨を散ずるとある。まことに厳しい規則を定めているといえよう。末尾には

五湖雲水　混居一堂　既集徒侶　須明紀綱
或凡或聖　時隠時彰　神化無定　道規有常

という詩が掲げてある。

『長春真人清規榜』には，山すなわち金蓋山内の道観に止住する全真道士たちは，清虚であり，つねに見性，養命，柔弱，謙和，慈悲を心がけなければならない。また，他に対して遜り，塵情を起してはいけない。労働はしなければならないが，過度になってはいけない。衣食も過度になり，貪ってもいけない。観内に余裕のものがあれば貧寒のもの，他処の人々に施すべきである。掃除，汲水に努める一方，私意，怒心をもたず，ひまがあれば一室にあって心を澄ます必要がある。真性を煉り，ものに執着せず，是非を論ぜず，つねに湛然として心を動かさず，声色に誤らされず，無欲に徹し，三教の門人に会えば平等に対応し，怠慢，驕心を起さない。理由もなく道観から出ず，夕刻には早く戸を閉めるけれども，寅の日に限っては朝晩門を開けておく。接待に対しては二心をもたず，尋ねてきた者があればその人柄をみ，志気に乏しい者は容れないし，詐偽，奸詐，汚徒も容れないようにする。出家希望者であっても勝手には引入れず，道気，悟道，家風の善悪，徳行の浅深を判断してから対処する。観内の諸事を弁ずるにはまず観主，ついで一堂の道衆と評論して実行する。化導する際には師家の名目を詐ることはできない。また，檀越たちの物をとって自己のものとしてはいけない。これは，道衆をあざむくことになるが，上天はこ

れらの非違は見逃がさず，必ずその咎めをうけるだろう，と記されている。

以上の内容は，陸道和『全真清規』所収の「長春真人規榜」と多少の文字の出入はあるが，ほとんど同意である。『清規玄妙』が初期の清規の趣旨に副っている例のひとつとなろう。

最後の「執事榜」の内容は，つぎのようなものである。すなわち，大厦は一木のよく支えうるものではなく，必ず衆材の助けが必要である。同様に，叢林とて孤身で立つことはできない。多くの職に当るものが助け，仕事の量をはかり，所管に従ってともに経営していかなければならない。尊卑には順序があり，それぞれの分に従って事を遂行する。我々はすでに皇恩に浴して，織らず，耕作もせずに生活している。そこで，勤慎し，空しく日を送ることなく，課経や労働に従事しなければならない。従って，規矩をたて，職によってそれぞれ所管のことを遂行する必要がある。つぎに，その職務を掲げる。

都監　都管　知観　副観　書記　知客　司庫　典座　買弁　貼案　飯頭　行堂　火頭　水頭　茶頭　値歳　巡山　田庄　園頭　圃頭

西序

靜主　高功　都講　監斎　知磬　表白　経師　堂主　香燈　殿主　巡照　侍者　啓閉　雑務　知隨　童子

以上が「執事榜」のごく概略の内容の紹介だが，最後の職名についてはその職務内容がわからないので，ここでは原文のまま掲げるに止めておく。なお，以上の職名は青松観宣道部重刊本『全真清規』にも同様にのせられているから，少くとも相当規模の道観には19世紀の前半以後今日にいたるまで，これらの役職が設けられていたことと思われる。

4.まとめ

中国の道教教団のうち，12世紀の中葉に王重陽によって創立された全真教のみに特長的な，規模の大きな道観内に起居する道士たちの生活規定ともいうべき清規について，先ず全真教団が清規を取入れた原因と思われる開祖の伝記の一部を紹介し，ついで最初の清規である陸道和所編『全真清規』を取上げ，続いて『全真須知』，青松観宣道部重刊本『全真清規』などと簡単に『清規玄妙』の内容とを比較したのち，同書の中心的編者と思われる閔懶雲の伝記と，同書の一部の内容とを紹介した。まだ探究も不十分であり，理解の足りないことも手伝って，いわば研究メモ的なごく大雑把な紹介にはすぎなかったけれども，それでも一応は「清規」とよばれている規定の内容と性格の一端は，おわかり頂けたのではないかと思っている。

新興の意気に燃え，丘長春のチンギズ＝ハーンからえた信任を利して，教勢を大幅に延し，全盛を誇っていた最中に起った仏道論争によって大きな打撃をうけた全真教は，そののちしだいに貴権の勢力と結びついてしだいに教勢を回復していった。けれども，そのために，内容，性格ともに初期の清新さは失われ，清規はほとんど空文化する形となった。それには，明朝の対道教政策も与って力があったように思われる。その状態を歎いた清初の全真道士崑陽子王常月は，教団の改革に力を傾けたが，その一環として清規を厳正にして再生を計ったようである。

それをうけたのが，壮歳にして金蓋山に入った閔懶雲であった。かれは2，3の道士と協力しながら，王常月の考えた清規を素案にして，努力の末に『清規玄妙』を完成した。同書の精神と内容は，文化大革命までは一応教団内で守られていた。その内容の一部は本文で紹介したが，その

なかには本文でのべたように，三教同源論を主張していた王重陽の素志を生かして，仏儒をともに頂礼せよとか，仏教をそしらぬようにと勧めている個処がある。また，道観内に設けられた方丈以下の役職の責務を守ること，起居動作はすべて規定に隨うようきびしく戒めている点が，とくに注目をひく。本文では省いてしまったが，規定に背いた場合には，罰斎，罰香，跪香のような軽い処罰から，逐出，杖責革出，炙眉，さらには架火焚身という極刑まである。もって，いかにかれが教団組織の確立と道士たちの質の向上に腐心していたかが理解されるであろう。なお，申し遅れたが，かれはおそらく王重陽の意途を忖度した結果であろうが，禅宗的要素をかなり多く取入れている。

おそらく，『清規玄妙』が制定，維持された結果であろうが，衰えたとはいいながら，以後全真教団は他教団とはいささか異なる教風を持ち続けることができたといっても差支えないであろう。私が，1942年に北京の白雲観に一週間滞在した際の，観内在住道士の態度には，つねに凛とした趣きがあった。ことに，斎堂に入るための集合，入堂の動作，食事中の様子などは，『清規玄妙』の規定とほとんど同様であった。その様子は，いまでも瞼に残っている。そのような点からいっても，同書は全真教研究にとって，きわめて重要な資料であると考える。それにも拘らず，そのくわしい研究はほとんど手がつけられていない。ぜひ，将来その研究がさかんになることが望まれる。

なお，私も研究を続けるつもりではあるが，まだ手をそめてから時間がたっていない。みた範囲もきわめて狭い。そのために，本稿にはいくたの欠点があるであろう。お気付きの点があったならば，細大となくぜひ示教をお願いしたいと思う。(1995.11.22稿)

註

(1) 吉岡義豊『白雲観の道教』(1945年，北京，新民印書館刊)17頁以下参照。ただし，本書は白雲観の紹介を目的としているために，『白雲観全真道範』をまとめて説明したところはなく，各処でばらばらにふれられている。なお，観内の騒動その他については，直接私に告げられたことである。そうして，仄聞するところによれば，安世霖は戦後反対派の手によって焚刑に処せられたという。

(2) 五十嵐賢隆『太清宮志』(1938年，奉天（現瀋陽），満州図書文具会社刊）参照。

(3) 全真教では後述のように分派を開創することが許されていた。『太清宮志』75頁以下，小柳司気太『白雲観志』91頁以下などを参照。

(4) 志賀市子「香港の道教系宗教結社について――近代民衆道教研究へ向けて――」(「東方宗教」85号，1995年，日本道教学会刊所収）参照。

(5) 『金蓋心燈』には，『古書隠楼蔵書』本もあるが，ここでは，1983年，丹青図書刊の『道教文献』第10～第11冊所収本(1876年重刊本)を使用した。なお，『金蓋心燈』は竜門派の説明に便利なために，しばしば一般に使用されている。

(6) 荘嚴居士『道統源流』は，1929年上海老咸章刊。故吉岡義豊旧蔵本。私は同氏より借用して筆写したが，その際，頁数を記さなかったために，原書の頁数は不明である。

(7) 註4同稿による。

(8) 『元始無量度人上品妙経』巻一は上海版道蔵第1巻所収。

(9) 『長春祖師垂訓文』は，その語録と併せて，中華民国甲戌 (1934) 4月，白雲観から単独でも刊行されている。

(10) 閔懶雲の伝は，晏端「閔懶雲先生」(『金蓋心燈』付篇)，楊維崑「閔懶雲先生伝」(同上書)，沈秉成

「懶雲先生伝」（同上書），閔一得「自述」（『清規玄妙』巻首），卿希泰主編『中国道教』第1巻398頁，閔一得の条，荘厳居士『道統源流』閔懶雲宗師の条などにみえる。

(11) のちには，全真教のみならず，正一教や上清派などもこれに倣うようになった。

(12) 分派名，派祖名とその略伝，派詩を集めたものが「宗派別」，「宗派頭」とよばれるもので，『全真須知』，小柳司気太『白雲観志』（1934年，東方文化学院東京研究所刊）巻3，諸真宗派総簿など参照。遇山派の派詩はすべてで100字である。つぎに掲げる竜門派の派詩も100字ながら，なかには20字，40字の派詩もある。

(13) 陶靖菴は，竜門派第7代王崑陽の弟子で，金蓋山雲巣支派を開いた道士である。その伝は，『金蓋心燈』巻2，「靖庵先生伝」参照。そこには墓表も附されている。

(14) 鶏足道者黄真人の伝は『金蓋心燈』巻6上（同第2冊，479頁以下）参照。かれは斗法にすぐれていたというが，いかなる秘法かわからない。また，野怛婆闍の読み方も不明である。示教をお願いしたい。

(15) 王常月の簡単な伝記は，『中国道教』第1冊392頁，王常月の条，『金蓋心燈』巻1，王崑陽律師伝の条など参照。

(16) 吉岡義豊『道教の実態』（1941年，北京，興亜宗教協会刊）279頁以下参照。ただ，畏友に対して誠に申訳ないことながら，まったくの書き下し文であって，難解な個所についての説明も註釈もない。従って，読解しにくい個所が少なくない。また，時折省略，もしくは脱落した部分がある。できれば，解説をつけた真の意味における和訳をしてほしかったと思う。

(17) この「遺言」は，文中に「我不及到丙辰年了。我今於冬至日。演政府受事。云云」の一句があり，また「我九才皈道」ともみえ，末尾に「不肖傅臣泣血謹述」と記されている。もし「丙辰」を1796年とすれば，閔懶雲38才の時となり，「九才皈道」の一句も，かれの伝とは異なる。従って何人の遺「言」なのか，いまの私にはわからないので，後考に俟ちたい。

(18) 拙稿「全真教の清規について」（『東方学会創立五十周年紀念論文集』近刊，東方学会）参照。

(19) 役人と訳したが，原文は「父母官」である。全真教では出家して俗縁を絶つので，父母に対しては他人と同様にしなければならない。あるいは，父母官は実の父母の謂かもしれないが，ここでは敢えて「役人」と訳してみた。示教をお願いしたい。また，「三揖三叩」のくわしいやり方も説明してあるが，紹介ははぶく。

(20) いわゆる非時食である。禅宗的といっても差支えなかろう。

(21) 陸道和『全真清規』（上海版道蔵第989冊所収）に「三不起身」の条あり，本条はこれをうけたものであろう。

(22) 「長春真人執事榜」については註18同稿参照。「清規榜」については拙稿「道教清規考——清規玄妙について——」（拙著『中国宗教における受容・変容・行容——道教を軸として——』，1979年，山川出版社刊所収）参照。なお，後者執筆当時の私は，清規を「十方叢林内において規矩にそむいたときの道士に対する罰則」と考えていた。のちに，この考えの誤っていることに気づいたが，同稿はその誤った考え方に従って執筆されている。お許しをえたい。

補註　掛単については，註2同書193頁以下にくわしい説明がある。ただし，そこでは「掛衲」と記されている。

On Qinggui of Quan-zhen jiao (II)

Noritada KUBO

The *Qinggui Xuanmiao* is a monastic code edited by Taoist priests led by Min Lanyun, who was born in the Wuxing prefecture, Zhejiang, in the mid-18th century. Other codes, such as the *Quanzhen Xuzhi*, published by the Taiqing Gong temple in 1937, and the *Quanzhen Qinggui*, published by the Mission division of the Qingsong Guan temple, Kowloon, Hong-kong, in 1972, were under the influence of the *Qinggui Xuanmiao*. Min Lanyun, concerning whose birth a mysterious legend is known, was constitutionally weak and had difficulty in walking. After he was initiated into the Chongdao Guan temple of the Jingai mountain, where he was instructed in *daoyin* (breathing) method by the head of the temple, he became healthy and led an asoetic life. Later he got a position in the Yunnan province government, following his father's wish, but after the parents' death he returned to the Jingai mountain and devoted himself to ascetic practice and traning his disciples. Meanwhile, he esteblished a monastic code about monastic priests' daily life and practice, on the basis of the rough plan made by a priest Wang Changyue. This code, which we know as the *Qinggui Xuanmiao*, reflects the prominent feature of the Quan-zhen jiao (Teaching of Complete Perfection) to which he belonged, that is the integration of Confucianism, Buddhism and Taoism. In addition, the *Qinggui Xuanmiao* prescribes severe punishment for a violation of the code, and this is thought to be a reason that the Quan-zhen jiao priests are well-disciplined, unlike those in other sects. Therefore, the *Qinggui Xuanmiao* is a book important to study the quality of the Quan-zhen jiao.